
初恋前夜

C.C

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初恋前夜

【Nコード】

N0678Q

【作者名】

C・C

【あらすじ】

彼女は女で。ボクも女で。友達としてとか、異性としてとか、そういう区別がボクは上手くつけられなかった。

冷たく硬い床に背中を預けながら、仰向けに身体を投げ出して空を眺めていた。

大きくなったり小さくなったりする白い雲を、黒い影が裂いて通り過ぎる。時折通り過ぎるそれは目の前の景色をぐちゃぐちゃに壊していった。

ぷくぷくと鼻と口から漏れ出す小さな泡が、ゆっくりと画像を取り戻す空へと列を成して上ってゆく。

冷たいはずなのにどこか生温かいソコはまるで母親の胎内のように——もちろん、はつきりとその場所の記憶が残っているわけではないが、苦しいという身体の反応とは裏腹に、その場所が酷く心地いいと感じている。

——このまま。

ずっとプールの底に沈んでいてもいいような気がして、照りつける太陽の光が屈折して両の目を焼くと、反射的に閉じた目蓋をそのまま閉ざした。

小さい頃から何故か、プールに入ると底に沈むクセがあった。

あの頃は息が苦しくなる前に必ず母に引き上げられてしまったが、母の居ない学校のプールは邪魔をするものが誰も居ない。

『死んじやうでしょ！』

母はいつもそう言って目を三角に見開いて怒ったが、死と言うものを望んでプールの底に沈んでいるわけではない。

ただ、そこがあまりにも居心地がよくて——母親の胎内に抱か

れているような気がして深琴^{みこと}はその場所からなかなか離れることが出来なかっただけ、だ。

父も母も居ないその場所は深琴に何も指示しない。ただじっと、目に見えない膜で深琴を口煩い外の世界から守ってくれているのだ。

少々息が苦しくなってきた、思わず目を見開いた。

飛び込んできた世界は水深1m30?の膜を突き破ってボクの顔を明るく照らしている。

太陽がチラチラと揺れて瞬いている。

右の方から現れた黒い影が、目を閉じる前に眺めていた雲を追いか求めるボクの視界を遮ってゆく——その。華奢な身体のラインに見覚えがあるような気がしてボクが目を凝らすと、黒い影はゆっくりと大きくなって、たどたどしいながらも真っ直ぐにボクの方へと近づいてくる。

「……………深琴ちゃん!？」

黒い影から伸びる白い手がプールの底に沈んだボクの手に触れた瞬間、温かい掌からボクの名前を呼ぶ彼女の声が聞えた気がした。

何て温かい手なのだろう。

そう思いながら、黒髪を踊らすスクール水着の人魚をぼうつと見ている。

自覚はないが意識は次第に薄れていた。

彼女の腕に抱かれて死ぬのなら本望だ、といっそ安らかな気持ちにさえなっていた。

しかし、それが間違いだと言わんばかりにボクの安らぎは乱暴で

粗雑な二本の腕に直ぐに引き裂かれた。

「オレを殺す気ですか、コノヤロー……………」

恨み言を言い終えてからゲホゲホと噎せる、格好の悪い男を見ながらボクも同様にゲホゲホと咳き込んだ。

「泳げねーなら先に言え、オレも泳げねーから事後報告な！」

プールの底からどっちが溺れているのかも分からないような状態で引き上げられ、重たい身体を投げ出されたプールサイドの床は焼けるように熱い。

傍らで咳き込みながらもゆっくりと上体を起こした担任の溝端をぼうつと見てみると、あの、プールの底でボクの手を掴んだ暖かい掌がそつと肩に触れたのが分かった。

「……………大丈夫？」

濡れて首筋に張り付いた黒髪から水が染み出て大きく開いた白い胸元を伝っていた。

溝端とは反対側に座り込んだ彼女の後ろには、彼女と同じ水着を纏った生徒たちが数人、佇んで心配そうにボクを見ている。

今日の最後の授業はまだ半分ほどの時間を残して頓挫してしまつた——まあ、もともと。泳げない先生に見守られた水泳の授業は最初から最後までが自由時間、というものだったが。

「動ける？大丈夫？」

「動けるなら着替えて保健室に行つて、ベットで横になつた方がいいんじゃない？」と、ボクの肩に手を置いたまま、彼女が心配そうに尋ねる。

呼吸は乱れたまま、直ぐには落ち着きそうもなかったが、保健室に行つてベットを借りるほどのダメージは受けていなかったのので、ボクは首を左右に振るとゆっくりと身体を起した。

着替えが終わり、更衣室に二人、居残っていた。

「本当に大丈夫？」

不安そうに眉根を寄せて尋ねる若葉^{わかば}を、深琴は赤く濁った目でじつと見詰め返す。

「ああ」とだけ、短く返した深琴は濡れた髪にタオルを押し当てた。
「——でもワタシ、深琴ちゃんが泳げないなんて知らなかったわ」
言いながら更衣室のベンチに腰を下ろし、濡れた髪をタオルで揉む仕草がカワイイと思う。

小さい頃から知っている彼女はいつだって強く、いつだって格好よくて、そしていつだってかわいかった。

「ボクも知らなかった」

何を考えているわけではなかったが、彼女の言葉に釣られるようにして言葉が口をついて出る。

「え？自分が泳げないって知らなかったの？」

信じられない、と言って彼女は笑った。鈴が転がるような笑い声が耳に心地いい。

「——ありがとう、若葉」

隣に腰を下ろし、そっと囁くように言った。

肩が触れ、制服を着ているのに何故か直に触れたような気がして酷く肩が熱かった。

「え、ああ、お礼なんて」

そう感じたのは彼女も同じだったのだろうか。

一瞬身を固くして、それから少しだけ身体を離れた彼女が珍しくぎこちない笑顔を浮かべている。

「実際助けたのは溝端先生だし……」

歯切れの悪い言い方でそれだけを言うと、彼女はす、と立ち上がって濡れた髪を乱暴にタオルで揉む。黒い髪がオレンジのタオルで

揉みくちやにされる度に、白い頂がちらちらと見隠れした。

「——おい、その後どうした」

若葉の白い頂に掌を押し当てていた。

彼女の体温と動揺を、掌に感じていた。

誰かの——いや、確かに聞き覚えのある声が直ぐ傍でした事も
気にならなかった。

ノックの後、遠慮がちに更衣室のドアが少しずつスライドし、し
つとりと濡れたままの髪を揺らして溝端先生がそつと中を覗きこん
だのだと気配で分かっている——

「若葉……」

ぐ、と白い頂に押し当てた掌に力を込めた。

立ち上がって背伸びをすると、若葉の頬をもう一方の掌で包むよ
うに覆う。

ごくり、と若葉が唾を飲み込んだのが分かった。

「おい、何を——」

徐々に力を増すボクの腕を、更衣室に飛び込んできた溝端が掴ん
で制した。

何を、と聞かれてどう答えればいいのか、全く分からなかった——

——ただ。少しだけ怯えたような目をした若葉をじっと見つめ返す
ことしか出来なかった。

そうして見つめあったまま、ボクがずっと黙り込んでいたので溝
端は掴んだボクの腕を思い切り引っ張って若葉から引き離れた。

「こんなトコに二人きりで何をおっぱじめるつもりだったんですか」
咎めるように言って、溝端はタバコの匂いがする顔をボクに近づ
ける。

「——え、いや、あの、深琴ちゃんはただワタシが寒くないか気にしてくれただけで」

ボクを見据える濁った目を見返しながら、苦しい言い訳をしてくれた若葉の声を聞いている。

「あー、そうか。なら和泉は先に教室に戻ってろ」

ボクから視線を離さずに溝端が言つと、背中で更衣室のドアが静かに閉められる音がした。

ドアが完全に閉ざされる間際、「深琴ちゃんは何も悪くありません」という、若葉の声がした。

*

「——あんまりそう言うの、よくないと思うんだよね」

「前から言おうと思ってたんだけど」という前置きの後、ポケットからタバコを取り出して溝端が言った。

「着替えるのも一緒、風呂も一緒、下手したらトイレの中まで一緒つての？」

言いながら、さっきまで若葉が座っていた場所に腰を下ろした溝端がタバコに火をつける。

「女同士なら当たり前かもしれないけど——でも、お前は少し違う気がするんだわ、いや、オレの気のせいだったら悪いんだけど」

ちりちりとタバコの先が赤く色付き、溝端の口から白い煙が立ち上る。男子もだろうが女子更衣室の中には灰皿などは無く、灰をどうつするのか一瞬疑問に思ったが、ボクの考えていることが分かったのか、溝端は先程タバコを取り出したのとは逆側の、白衣のポケットをゴソゴソと探ると中から薄汚れた携帯灰皿を取り出したのだっ

た。

「——中々言い難い話だと思うけど、でも気にしないで。先生でもう何人目になるか分からない、同じようなことをこの前長田君にも言われたし、別に相談したわけじゃないんだろうけどその後直ぐ須賀君にも言われたから」

所々が錆び付いたロッカーに背中を預け、座り込んだ溝端とは斜めに向かい合って話をする。転校してきてから彼は3ヶ月、女子生徒の制服を着用しないという以外には特に問題のないボクが、こうして担任と二人きりで向き合つのは初めてな気がした。

「そうか………なら、そう感じてるのはオレだけじゃないってわけだ」

言いながら、溝端はタバコの灰を面倒臭そうに携帯灰皿に落とす。
「と言う事はいずれ皆が感じちまう、皆がお前をそういう目で見るようになっちまうんだぞ？」

溝端の言葉が母の言葉と重なる。

何度聞かされたか分からない母の台詞は言い回しそのままにいつだって再現する自信があった。

「別に他人にどう見られようとボクは気にしません」

誰に咎められようと、優しく諭されようと、ボクの答えはいつも一つだった。

変態だと蔑まれても、病気だと後ろ指を指されても、ボクは若葉に対する想いを捨てるつもりはなかったし、その気持ちたちが彼らの言う、病気や常識から恐ろしく逸脱した感情だとは思ってもいなかった。

「いや、でも、お前は良くてその………」

タバコを口に咥えたまま、溝端が言い難そうに口をもごもごと動かしている。

「先生も若葉が好きなんですネ」

言いながら、同じ台詞を先週長田君に言った時の事を不意に思い出す。

顔を真っ赤に茹で上げた長田君は頷きこそしなかったが、大きな身体全体で彼女を好きだと認めていた。

若葉の彼に対する態度を見る限り、長田君はボクのライバルにすらならない相手だったが、純粹に若葉を想う気持ちには好感が持てた。

「ばか、そうじゃねーけど」

「でも、先生は若葉を見てるじゃないですか」

「オ、オレはほら、先生だから、受け持った生徒を全員ストーカーする勢いでだな」

「ボクがプールの底にずっと沈んでいたって全く気がつかなかったのに、それまで普通に泳いでいた若葉がボクに気付いて水中に潜った途端、泳げないクセにプールに飛び込んだじゃないですか」

吸い終えたタバコを溝端は携帯灰皿の中へ押し付けるようにしてしまうと、それを再びポケットの中に突っ込んだ。

返す言葉が無いのか、溝端はボクから顔を逸らすと肩で一つ、溜め息をつき、閉じられたドアをぼうつと眺めていた。

白衣のまま飛び込んだじゃ無いですか、学校に着替えと予備の白衣があつて良かったですね、と。思わず口から出そうになった憎まれ口を飲み込む。

好きなのかと聞かれて自分の気持ちを必死に隠そうとするヤツがボクは一番キライだった。

若葉は女で先生は男で。何も咎められることは無いのにどうして気持ちを隠さなければいけないのか。

堂々と——そう、長田君のように素直に気持ちを表現していい筈なのに。

「ボクたちがまだ子供で、他人の気持ちとかをあまり意識していなかった頃、一度だけ、若葉に好きって言った事がある。友達としてとか、異性としてとか、そういうのはまだ難しくて——いや、未だにそういう区別がボクは上手くつけられないけど——でも、幼馴染の若葉がどうしようもないくらい、その気持ちを伝えなければ苦しくて死んでしまいそうなくらい好きだったから、つい、言ってしまったんだ……」

お前は女なんだぞ、と。跡取り欲しさに可愛らしいものを奪って男として育ててきたクセに、若葉に対するボクの気持ちを察した途端、父はそう言って怒り狂った。

竹刀を振り回す父から逃げ、屋敷中を逃げ回りながら気がつくと涙を零していた。

何が悪いというのか。小さな頃からずっと憧れていた仲良しの若葉を抱きしめたい、守りたい、と想う気持ちの何が悪いと言うのか。小さなボクには全く分からなかった——いや、今だって。若葉に触れたいと思って手を伸ばしただけなのに、どうしてそれを他の誰かに咎められなければならないのか。分かったふりをしてはいるが、本当は何一つ、納得して理解などしてはいない。

「空気が凍りつく」っていうのはああいうのを言うんだろうなっと思って。一瞬にして表情が動かなくなってしまった若葉に、ボクはきつと何かいけない事を口にしてしまったんだってことだけ、理解した。もちろん、直ぐに否定したボクに若葉は『ワタシも大好きよ』って言うてくれたがきつと、ボクが同じ意味でそう言っただけじゃないってことくらい、分かってた筈だ。若葉の好きとボクの好き

は違う、ボクの欲しい好きは若葉の好きとは違う。若葉はそれわかってて、でもボクに優しくしてくれて……」

つい3ヶ月前に知り合ったばかりの教師相手に何を話しているのか。

自分でも良く分からなかったが、若葉がこの、あまり格好いい大人とは言い難い男を他の先生や生徒たちとは違った目で見ていることだけ、分かっていた。3ヶ月間一緒に居れば誰だって、彼女の視線が先生を特別な目で見ていることに気がつくだろう。

それが恋なのか愛なのか、ボクが求める”好き”なのかは分からないが、目の前のダメ教師が若葉の特別であることだけはわかる——そして。

「ボクも——」

小さく呟くと、溝端がゆっくりとボクを振り向くのが分かった。

目が合って、睨みたいような、笑いかけたいような、複雑な気持ちになって相変らず無表情を貫き通した。

そうして脳裏に、ボクが泳げ無い事を初めて知ったと言った彼女の顔を思い浮かべている。

ボクたちは幼馴染であったのに、もしかしたら互いに知らないことが多かったのかもしれない——そう。この、目の前のダメ教師にだけ向けられる若葉の笑顔を、この学校に転校してくるまで知らなかったように。

「ボクも知らなかったんだ」

若葉は女で、ボクも女で。

若葉は女で、目の前に居るダメ教師は男で。

若葉はいつだってカワイイから誰に好かれようと構った事ではなかったが——いつか。彼女が誰かを好きになってしまおうと言う事も、ボクは知らなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0678q/>

初恋前夜

2011年1月10日09時55分発行